

## 香港・マカオ見聞録

### 香港編

小川 眞一

#### 1. 香港国際空港

私たちはランタオ島にある香港国際空港に着陸した。私が香港を最初に訪れた1990年代の入口は啓徳空港であった。着陸態勢に入り高層ビル群の谷間をビクビクしながら空港に近づいていた。入国後いきなり九龍（カオルーン）の猥雑な雑踏に入り込んだ記憶がある。新しい国際空港は香港市内とは離れている。青馬大橋など新しい3本の橋で結ばれ、エアポートエクスプレス（機場快線）のほか高速バス便など多様で便利なアクセスが整備されている。空港は3800メートルの滑走路が2本、ターミナルも2つあって100近い航空会社が乗り入れている。年間の乗降客は延べ5000万人を越えアジアのハブとしてシンガポールのチャンギと世界の利便性を競っている。

香港新国際空港の建設は1998年の天安門事件の直後にスタートした。動揺する香港市民の目を将来の発展を約束させる大型プロジェクトに向けさせるため、英国と香港政府が政治的な意図をもって建設を始めたといわれる。完成後の一番機は、江沢民・中国国家主席の特別機が着陸した。返還一周年式典に出席した江主席は、建設前は膨大な建設費の無駄だと批判しておきながら完成後の新空港のセレモニーでは、香港返還の成功と繁栄を称えている。緊張して着陸した啓徳空港は廃止され跡地は豪華客船が寄航する船のターミナルとなった。香港の「空の玄関」から「海の玄関」として再出発している。

私たちは空港から市内ホテルまでタクシーで移動した。車上からは美しい青馬大橋のつり橋や巨大なコンテナターミナルのクレーン群が見える。青馬大橋の名前は、橋の両端の島である青衣島と馬湾島から名付けられている。橋のスパンは1377mであり、吊り橋として世界で6番目の規模である。道路鉄道併用橋としては世界一の長さを誇っている。橋は2層構造となっており、上層部には片側3車線の道路、下層部には2レーンの鉄道路と2車線の保守用道路が設けられている。日本企業と英国企業の合作で建設された橋である。香港ディズニーランドもこの近くにあり眺めが美しいアクセス道路である。ランタオ島は、新たな商業都市として生まれ変わり返還後も成長する香港、“コケの生えない転がる香港”の玄関口となっていた。

#### 2. ビクトリア・ピーク（太平天頂）

私たちは競馬場近くにある湾仔（ワンチャイ）のコスモポリタンホテルに宿泊した。このワンチャイ地区は戦後埋め立てによってつくられた超高層ビルの並ぶNEWワンチャイ地区と昔ながらの古い建物や市場が軒をならべる猥雑な下町情緒のあるショップが連なる地区からなっている。私たちの宿泊したコスモポリタンホテルは、前身が新華社香港支社で返還前の香港では中国大使館的な機能を持っていたビルであったことを後になって知った。今回の旅をアレンジしていただいた香港住人のTさんも勤務先の会社が近くて便利とこのホテルの1室を長期居住されていた。Tさんは、夕方まで執務中なので私たちは近くを散策する

ことにした。

ホテルの隣にはシーク教の寺院があり山道があった。国際都市香港である。見晴らしの良い場所を見つけようと20分ほど坂道を登った。何処までも車が横を通りすぎる山道が続いている。亜熱帯の夏は暑く坂道はきつい。途中のバス停から行先不明のバスに乗ってみた。ロンドンと同じ2階建ての路線バスである。地元の乗客ばかりではなく観光客らしい客も数組いて混んでいた。2階座席からの山の景色は眺めがよい。20分ほどで山頂に着いた。

成り行きに任せて到着した場所は「百万ドルの夜景」で有名なピーク・ギャレリア山頂であった。広場と飲食店のあるショッピング・ビルの屋上が展望台になっている。夜は混雑する展望台を私たちは占拠して静かに香港の全景を眺めることができた。ビクトリア・ハーバー方面には数多くの超高層ビルが立ち並んでいる。平地は少ないが数十階の高層ビルが多数あって人口密度が極めて高いことがよく分かる。船型や円筒形、奇抜な色彩など個性的なデザインの超高層ビル群が設計コンペをしているように乱立している。香港の繁栄を象徴するHSBC 香港上海銀行のビルが密集の中心付近にある。近くの3階建ての旧香港総督府はビルの谷間になって平屋のように見える。HSBC のビルは1986年に建てられバットン総督が総督府の目の前にある三角錐の特徴ある建物を見て、「中国の矛先が英国に向けられている」と冗談を飛ばしたことがあるという。香港返還という社会背景の中で21世紀以降の繁栄を確かめるため地相占いの風水が見立てた角度が偶然そうしたのであるか。返還を前に中国と英国の緊張関係が続いたことから中国側の設計者も総督府の反応も本音だったのかもしれない。世界最先端の技術を駆使して50億香港ドルを投じて建てられたビルは世界中の建築家の注目を集め構造、形態、材料、工法などあらゆる方面で新しい技術に挑戦している。内部の吊構造が提供する豊かな内部空間はつかみどころのなくなった建築の機能を文化象徴的に表現している。今は総督府とHSBCビルを多くの超高層ビル群が取り囲んでいる。

山頂からの帰りは、ケーブルカーのピーク・トラムを利用してセントラル中環まで下りた。反対方向のトラム上り駅は観光客が大行列をなしていた。意図していなかった観光コースと逆向きの選択は幸運であった。中環からはトラムに乗ってホテルに戻った。道の真ん中を優先して走る公共交通の2階建てトラムは乗客収容数も多く眺めも良い。日本の都市はどうして市電を次々に廃止してしまったのだろうか。モータリゼーションの合理性を優先させた街よりもトラムや市電のある人間優先の街の方を風情があり好ましいと感じた。

### 3. アヘン戦争

今の中国の歴史教科書は2冊に分かれていて1冊目は古代から2冊目はアヘン戦争から始まっているという。香港は中国の歴史第2部の始まりの舞台である。現在の香港が他の中国本土にある地域よりもはるかに巨大な経済的繁栄を享受し「東洋の真珠」と呼ばれるほどの発展を遂げたのは歴史の皮肉としかいいようがない。元来本土からの難民が集まってできた街である。一部の人間とはいえ本土に残っている人たちよりも多くの富を享受し

て世界の重要地となっているのは不思議である。

香港は北京語ではシアンガンと発音する。これを英語で「ホンコン」と呼ぶ由来は、アヘン戦争に遡る。英軍が初めてアバディーン付近に上陸した時、土地の名を知らなかった。そこで地元の民に地名を聞いたところ「ホンコン」と言った。この発音は広東語のもの（ヒョーンゴン）とも異なり、現地の水上生活者・蛋民の言葉であった。

19 世紀初頭の清国は物産が豊富で政治は安定し、不足するものはなかった。清国は平等互惠の通商の精神を全く持っていなかった。1793 年にイギリスの使節として北京を訪問したマカートニー卿が、中国皇帝に対する最敬礼である「三跪九叩頭」を拒絶してイギリス流に肩膝をついて屈辱を回避した有名なドラマがある。当時のイギリスは、茶、陶磁器、絹を大量に清から輸入していた。清国から輸入する茶は、イギリス人には生活必需品であったが清国が輸入する商品は時計や望遠鏡のような富裕層向けの不急不用の奢侈品ばかりで大量に輸出可能な商品がなかった。イギリスの毛織物は中国人の好みに合わないので拒まれた。当時茶の供給源は中国にしかなかった。イギリス側ではこれを買取る見返りの輸出品がなくイギリスの大幅な輸入超過であった。見返りの代価としてメキシコやスペインから買い入れた銀貨が使われた。イギリスの支払った銀は清朝乾隆時代の全盛を現出させた。イギリスは産業革命の資本やアメリカ独立戦争の戦費を確保するため、銀の国外流出を抑制する政策をとった。また、イギリスはインドに産する綿花をもって中国貿易に対する見返り品としようとしたが勤勉な中国労働者はこの綿花をもって綿布として再輸出して大きな利益をあげていた。これが 19 世紀初頭における広東貿易の大勢であった。しかし産業革命の波は形勢を逆転させることになる。イギリスのランカシャーの織機の発達は、手工業的な中国の紡績業を圧倒するようになる。さらにとんでもない輸入品が中国市場に現われた。アヘンである。イギリスは植民地のインドで栽培したアヘンを清に密輸出する事で超過分を相殺し三角貿易を整えた。アヘンは中国人の嗜好に合って急激に需要が増大した。この奸策は見事に成功した。今度は、清が茶の輸出だけでは足りず銀で決済したことからにわかに貿易収支が逆転して清は経済危機に陥った。清国内の銀保有量が激減し銀の高騰を招いた。またアヘンは健康に害があることから清政府は、アヘンの輸入を禁止したが、沿海の人民はイギリス商人と密貿易を行い、内地に転売する秘密結社が勢力をのばした。清国内にはアヘン吸引の悪弊が広まっていき、健康を害する者が多くなり、風紀も退廃した。多数の失業者を出しますます密貿易者が活躍した。

アヘン戦争は 1940 年から 42 年に阿片禁輸問題をめぐって英国・清間でおこった戦争である。アヘンは衰退期に入った清国にはうってつけの商品であった。腐敗した官僚はこれを黙認していた。1838 年末、道光帝はアヘンの販売、吸引のいずれにも死罪をもって臨む強硬策を決断した。皇帝の命を受けた林則徐は、イギリス貿易商から手持ちのアヘンの約 1300 トン（2 万 3 千箱）を没収し、大きな穴を掘って、その中へ海水と生石灰をまぜてアヘンを投入し化学処理した。

英国の対応は、パーマストン子爵とチャールズ・エリオット外交官が行なっていた。林

則徐による一連の阿片取り締まりがはじまると、エリオットはイギリス商人の所持する阿片の引き渡しの要求には応じるも誓約書の提出は拒否しマカオに退去した。林則徐は九竜半島でのイギリス船員による現地民殺害を口実にマカオを武力封鎖して市内の食料を断ち、さらに井戸に毒を撒いてイギリス人を毒殺しようと企んだ。英国外相パーマストン子爵は現地イギリス人の保護の名目で植民地勤務経験が豊富なチャールズ・エリオットを貿易監察官として広東に派遣した。パーマストン子爵は東インド艦隊に対し、清に対する軍事行動を通達した。自由貿易を唱えるイギリス艦船の発砲が相次ぎ戦争が始まった。蒸気機関によって航行するイギリス軍艦はたやすく中国沿岸に集結され、その大砲は中国の砲台を沈黙させ、イギリスの艦隊は海上を封鎖し揚子江を遮断して中国の南部より北部へおくる穀物輸送の途を断った。半身不随となった清朝は1842年8月イギリスの提出する条件を呑んで南京条約に調印した。この条約で清は多額の賠償金と香港の割譲、広東、厦門、福州、寧波、上海の5港を外国貿易とすることを認め、治外法権、関税自主権放棄、最恵国待遇条項承認などを余儀なくされた。南京条約は香港をイギリスに割譲することを約した。アヘン戦争の結果、イギリスは、自国では輸入を許していないアヘンを清に押し付けることによって揺らぎ出していたインド支配の財政基盤をささえ、同時に中国大陆への帝国主義的野望を満たした。アヘン戦争によってイギリスのジャーディーン・マセソン商会やサッスーン商会は、アヘン販売の利権を独占的に手中におさめ巨万の富を得た。

アヘンは清に開国をもたらしたのみならずその後の中国の社会を大きく変えていった。漢民族解放運動の先駆と見られる太平天国の乱が起こり、アロー号事件、天津条約、北京条約、日清戦争、義和団の乱などによって“眠れる獅子”は列強の帝国主義の餌食となっていた。国内では清朝の打倒と外国勢力の排除をめざす辛亥革命がおきるが頓挫して地方軍閥の台頭で軍閥割拠の時代となり内戦状態に入ることになる。清朝が禁煙章程を出したときには諸省では既にアヘン税が主要な財源となっていて、地方官が禁煙を実行しようにも、代替財源の確保が困難という状況で実現は不可能だった。その後の禁煙運動によってある程度は取締りが進んだが、ケシの栽培の習慣は暗に残ってひそかに続けられた。辛亥革命の頓挫によって軍閥割拠の時代になると、今まで存在していたアヘン禁止令は空文化した。中央政府は求心力を失って軍閥を取り締まることが困難になり、軍閥は独自の道を歩むために財源を見出すことになる。

アヘン戦争の前後、清朝は増大するイギリスのインド産アヘン流入と銀の流出に対抗するため、自国のケシの栽培を奨励する苦肉の策をとったことがある。裏目に出てアヘン嗜好者が著しく増加したため厳格な禁止措置がなされたが、アヘンを撲滅するには程遠かった。アヘン対策が進まない裏には密売業者と地方の軍閥の存在があった。彼らにとってケシの栽培やアヘンの取引は貴重な収入源であった。また配下の者たちの闘争心を煽る格好の向精神薬としてアヘン吸飲を野放しにした。張学良や廃帝溥儀夫人の婉容（ワンロン）がアヘン常習者であったことは有名である。各地の軍閥はケシの栽培を争って奨励し、アヘンの争奪がしばしば内戦の火種となっていた。軽量で高価なアヘンは通貨と同等に扱わ

れた。

中国東北部ではアヘンの供給と需要は豊富であった。特に熱河は良質なアヘンとして人気があった。熱河は政府の指導のもとで、アヘンの栽培から収買、市場流通、消費の流れが作られ、アヘンの一大供給地であった。ありとあらゆる産地のアヘンが流入し中国は再び世界最大のアヘン市場となっていた。

また、日本でも満州国関東軍によってアヘンの栽培と取引がなされ巨額の資金が生み出されたことがある。資金は満州国経営の基礎資金に使われたり政治家たちに渡り特務機関や憲兵隊の謀略資金となったりしたといわれる。関東軍の熱河侵攻作戦は張学良ら東北財閥の財源である熱河アヘンを奪取しこれを満州国の財源にしようとするのが隠されたもう1つの目的であったといわれる。その真偽は未だ暗闇にあるが「阿片王」（佐野眞一著・新潮社）に詳しい。

ともかくこの香港という蚤民が住んでいた地はアヘンによって大きく変わった。この地では巨額の財が集中し表社会と裏社会の両方において取引があって成長した。外国からも中国本土から、軍隊も商人も資本家も労働者も集まった。富裕者も難民も集まる場所になり中国社会を大きく変化させていった起爆の地であったことは間違いない。

#### 4. 香港返還

1997年6月30日、激しい雨のなか香港は英国から中国に返還された。返還式典はワッティ湾仔の新コンベンションセンターで行われた。中国側は江沢民国家主席、李鵬首相、香港特別行政区の董建華初代行政長官、英国側からはチャールズ皇太子、ブレア首相、バッテン総督らだった。40カ国の代表ら4千人が見守った。

チャールズ皇太子の演説に英国国歌の演奏が続き英国旗と香港旗が降ろされた。続いて中国国歌の演奏が始まり、中国旗と香港特区旗が掲揚された。英国の植民地・香港はその瞬間中国に祖国復帰した。式典は45分で終わり、会場を後にするチャールズ皇太子とバッテン総督を銭其琛副首相兼外相が見送った。二人は、会場に隣接する駐留英国軍総司令部前のビクトリア港の栈橋から英王室のブリタニア号に消えた。

私はこのときロンドンでBBC TVの映像を観ていた。ロンドンの街の空気はひどく静かだった。放送も短く特集番組もない。小雨の夜、ブリタニア号が静かに出帆する映像がひどく印象に残っている。駐留英国軍総司令部前の英国のさよならセレモニーでは、チャールズ英皇太子が「英国は、香港にさよならは言わない。英国は香港の歴史の一部であり、香港は英国の歴史の一部である。」とエリザベス女王のメッセージが代読された。

一方、中国側のセレモニーでは、江主席は「1国2制度と高度な自治は変えない」と挨拶、香港の安定と繁栄を約束した。中国国歌の演奏と五星紅旗が掲揚され英国の植民地・香港は中国に返された。

翌日ロンドンでBP社員との会食の機会があつて、香港の話を差し向けたが話がのらない。話題の矛先を少し変えて“日本も朝鮮、台湾、満州などを植民地としたことがあつたが、第2次大戦後は、植民地はなくなった。”と話すと「それは残念だったね。」と簡単な相槌

を聞かされたことを覚えている。英国人にとっては栄光の遺産が少し減って残念だということのようだ。日本人のような贖罪の意識はまるでない。韓国・中国からの歴史カードに謝罪を繰り返してきた日本人とは違うプライドがあるようだ。英国人の心の中には今なお海賊精神が強く残っているようである。1982 年の英国とアルゼンチンとの間のフォークランド島戦争の際英国の軍艦コンクァラー（名前も勇ましい）はアルゼンチンの巡洋艦を撃沈して母港へ帰る際、英国旗（ユニオン・ジャック）に加えて海賊のシンボルである髑髏と十字に組み合わされた大腿骨が描かれている旗を掲げて入港している。大航海時代エリザベス女王 I 世が海賊船に認可状を出して私掠船（Privateer）として公認し、ドレイク船長に SIR の称号まで与え海賊が英国にとっては英雄だったロマンチックな歴史がある。戦後独立後の今も多くのコモンウェルス国々において、英女王が君臨し感謝されている関係も残っている。植民地統治における大ベテランと若造の違いの差があったのだと思う。

余談であるがアヘン戦争で登場したイギリスのパーマストン外相のことについて述べる。

主に外交の分野で活躍し、大英帝国の国益や英国国民の利益が損なわれることを許容しない強硬外交を行ったことで知られているビクトリア朝の政治家である。子爵で自由党（ホイッグ党）に所属し、首相を 2 期務め、外務大臣を 3 期にわたって務めた。クリミア戦争でロシアの進出を抑え、エジプト・中国方面にもイギリスの勢力を伸ばした。ヨーロッパでは会議外交によって各国の利害を調整しながら自由主義化・ナショナリズム運動を支援する外交を行った。アヘン戦争は、外相パーマストンの主導で対清軍の派遣がなされた。「アヘンの密輸」という開戦理由に対しては、当時のイギリス国内では清教徒的な考え方を持つ人々からの反発が強かった。下院では、当時自由党のウィリアム・グラッドストーン（後に首相）から「これほど不正な恥さらしな戦争はかつて聞いたことがない。ユニオン・ジャックの国旗はけがされた」と非難され「不義の戦争」とする批判があったが、清への出兵に関する予算案は僅差で承認され、英国海軍は、東洋艦隊を編成して派遣した。低開発国に対しては砲艦外交で不平等条約による自由貿易を強要して帝国に組み込む「自由貿易帝国主義」を遂行した。大英帝国の海洋覇権に裏打ちされた「パクス・ブリタニカ」を象徴する人物である。

筆者がロンドンに駐在していたころしばしば参加した日英の昼食会があった。在英邦人企業の責任者たち 100 名を毎月招待する昼食会で名前をパーマストン会と称し現在も続いている。かつてのパクス・ブリタニカの栄光を日英同盟のパートナーであった日本の企業人にも味わってほしいという遺産の名残であろうか。また、イギリスには毎年夏行事にプロムス（PROMS）という 8 週間におよぶ恒例のクラシック音楽コンサートがある。最終夜には、「Rule Britannia」、「Jerusalem」、「威風堂々」など愛国歌が繰り返し演奏されユニオン・ジャックの旗がふられ七つの海を支配した栄光に聴衆全員が熱狂する。イギリス人の心の中にはパクス・ブリタニカを誇る大英帝国は今も強く残っている。

中国への返還について香港の人たちの心の中の選択は複雑である。香港に住む人たち

は香港人という自らの存在を第2次大戦後数十年してやっと意識するようになった。経済成長に培われた自信から生まれたのだろう。元来香港はあくまで逃げてきた場所であり、故郷は大陸にあった。歴史的に香港固有のものがなく植民地によって街が出来ただけで独立という発想をなかなか持ち得なかった。自分たちではなく中・英によってすでに返還のシナリオができていた。返還後の香港社会を支える1国2制度の姿は植民地が生み出す利益を宗主国が吸い上げて行く構図と極めて似通っている。中国本土にとって香港は甘い蜜である。条約の99年という期間は当時の慣行で「100年以上の期限は余り長すぎて無効である」という意見があり最長という意味で99年とした。慣習上そのようにしただけであり実際は無期限という意味」と考えていたらしい。結局は、中英間の交渉で99年の期限で返却されることになったが、当時、今の香港の繁栄と返還の状況を予想したものがどれだけいたのであろうか。

## 5. 競馬場

法律上賭博が禁止されている中華人民共和国において、香港は賭博行為を含む競馬開催が行われている数少ない地域（特別行政区）である。

英国人にとって、植民地の街づくりは貿易に必要な建物をつくるだけではなかった。自分たちの余暇をいかに楽しむか、そのためのインフラ整備も十分にやっていた。元来、競馬場は日本の殺風景な外れ馬券が飛び交う荒んだ競馬場とはすこし趣が違う。英国流の紳士淑女の社交場でもある。香港競馬会は1884年に発足、90年から馬券システムが導入され、本格的な競馬が始まる。メンバーは、英国人だけではなく裕福な中国人も加わった。競馬場は2つあり香港競馬発祥の地は沼地が埋め立てられた香港島にある跑馬地（ハッピーバレー）競馬場と九龍半島の新界にある沙田（シャティン）競馬場がある。水曜日の夜にハッピー・バレーで、土曜または日曜の昼間にシャティンで開催される。香港人は賭け事が大好きで大の競馬好きである。賭け方も14種類の多彩な馬券があり単勝、複勝、馬連はもちろん、上位3頭を当てる三連単などバラエティーに富んでいる。香港競馬の過去10年間の馬券の年間売り上げ平均は100億米ドルで競馬市場としては日本、アメリカに次ぐ世界第3位の規模となっている。大レースの開催日には約8万人の観客が2つの競馬場を訪れる。世界最大の発光ダイオード・スクリーンがあり、観客は画面でレースを観ることができただけでなく、最新のオッズやレース情報を見ることができる。明瞭で解像度の高い画像が映し出されるLED（発光ダイオード）を使用している。スクリーンは長さ約35メートルでアジア最大のスクリーンという。私たちはレースを見る余裕はなかったが、宿泊ホテルの近くにハッピー・バレー競馬場があったため早朝でかけた。競馬場は自由開放されていて、熱狂するレースの場で多くの老若男女が体操やジョギングをしていた。北京、上海、台北などの朝の公園で見られる太極拳のグループはいなかった。多くは西洋風のテニスや筋トレスポーツを楽しんでいた。中国では古来より“賢人は未だ病まざるを治し、愚者は病気になってから治療する”といわれ太極拳、導引術、気功などいろいろな予防中医学の体操が庶民の間で盛んであるが、多忙なこの地では西洋型運動の方が好まれているようだ。

「転がる香港・・・」の中で博美が“香港人は博打好きで麻雀と競馬好きであること”を嗜めるが逆に香港人から逆襲される場面がある。世界中で市民 1 人当り競馬に費やす金が一番多いのは香港であり場外馬券場の数は地下鉄の駅数よりも多いという。

“香港には一文無しでやってきた人が多い。何もないところからはじめて少しでもいい暮らしをしようと一生懸命働いた。しかしここは働けば幸せに暮らせるようなところではない。普通に働いても家は買えないし将来は目に見えている。何かに賭けて増やさないとなにに登れない。しかし上ほど簡単に金が集まり株と不動産に賭けて増やすことができる。しかし不動産が値上がりし、裸一貫からのし上がった金持ちが資本を寡占している今の香港では一発逆転は成り立たなくなった。資本のない貧乏人には、博打しかない。博打で得られるのは金でもスリルでもなくここから脱出できるという夢だ。”

“香港とは、命を賭けて出てきてしまった人が集合する場所なのだ。博打は、この街に入る前からすでに始まっているのである。穏やかな生活を望む人は、もとよりこの街に来ない。香港で生きていくということは激しく、騙し騙され、血を流しながら自分の居場所を確保して行く闘い。競馬や麻雀にすら賭けられないような人間が、人生という博打にかけられるわけがない。”

彼らにとって競馬は娯楽と言うよりも社交の場であり貴重な情報交換の場であるのだ。

この街の競馬場は 360 度どちらをみても高層ビルがみえた。ビルの谷間を馬が走る競馬場は日本にもイギリスにもない光景であった。

## 6. 高速船のこと

香港は、香港島と対岸の九龍半島、それに大小さまざまな周辺諸島から成り立っており水上交通が盛んである。周辺諸島へは、香港島の中環（セントラル）ターミナルから各地へのフェリーが出ている。隣のマカオへは上環のマカオフェリーターミナルから、中国本土へは九龍サイドの尖沙咀にある国際フェリーターミナルからフェリーや高速船が出ている。マカオへの高速船は約 45 ノット（時速約 83 Km）で海上を走るボーイング社が開発した Boeing902 と称する水中翼船が走っている。軍用に開発された船であるが旅客用はジェット・ホイルという。ガスタービンを動力としたこの船は軍用では時速 200 Km の速度がだせるという。現在の旅客用では香港からマカオまで約 1 時間で移動する。マカオ路線は香港がイギリスの植民地で、マカオがポルトガルの植民地であった時代の 1962 年に、両地を結ぶ高速フェリーとして香港に拠点を置く信徳集团有限公司によって、運航が開始されている。ジェット・ホイルについては、奇しくも昨年、私たちは研究会の佐渡合宿で新潟ー佐渡（両津）間で同じタイプのジェット・ホイルに乗っている。船はおなじであるが、日本乗ったときよりも豪華な気分がした。ターミナル待合室には高級レストランや麻雀荘まである。小さなみやげ物店しかなく裏寂れた感のする日本海の佐渡への荒海の航海よりも南国のカジノ観光地への静穏な航海の方が華やかな気分になる。高速船の運航会社は日本では空路との競争で経営が苦しく採算がとれなくなって閉鎖・撤退に追い込まれているところが多い。高速船料金は高く、安価になった航空機との競争がある。マカオー香



港のカジノ観光のように航空機が利用できない路線で金持ちが高い料金で利用する航路では価値が出る。日本ではコスト節約のため新造船ではなく中古船を購入するしかないのであるが、この会社は新造船を使って黒字経営である。信徳集団はスタンレー・ホーが創始したマカオにおけるカジノ事業を独占する企業集団でカジノ観光の動脈として活躍し TurboJET（ターボジェット、噴射飛航）の高速フェリーを経営している。香港とマカオを中心に深圳、広州への航路など 7 路線を高速船によって運航している。私たちの利用した香港-マカオ路線は、ビジネス客のみならず、観光客の需要が 1 年中多いことから、5 分-15 分間隔で 24 時間運航されている。週末や旧正月などの繁忙期は予約がないと乗れないケースも多いという。香港・マカオの新興企業が運航する新造船はエネルギーで活気があった。違いは技術力の差ではなく経営力の差であるとおもう。

少し専門的になるが水中翼船のことについて調べてみた。

翼が全て水中にある。航空機用のターボジェットエンジンを動力としたウォータージェット推進である。水中翼船は、船底下部に飛行機の翼に似た水中翼をもつ船で、スピードが増すと、水流でこの水中翼に揚力が生れ、船体全体が水面上に浮かび上がる。このため、船の前進を妨げる造波抵抗と摩擦抵抗は少なくなり普通の船の 2 倍以上の高速で走ることが可能になる。大きな船体を細い支柱のみで空中に支え、高速で航行する水中翼船をみると、いかにも安定性が悪そうに見えるが、復元性は一般の船よりも高く設計されている。走行中に横波や横風によって傾斜した場合、片舷の翼の一部が水面に出て揚力が減る一方で、もう片方の翼が水面下により多く沈み、揚力が増える。両方の翼の揚力がバランスして船体の傾斜は自然にもとに戻るしくみがある。また高速航行中でもブレーキがかけやすい点も特長である。スピードが落ちると水中翼に対する揚力も減り、船体底部が水面に接するため急激に造波抵抗と摩擦抵抗が増大する。この抵抗によって大きなブレーキ効果が生まれる。構造的に、大型の貨物船には向かないが、その高速性と安定性は旅客輸送には最適で、離島航路で活躍している船である。そもそもの開発は軍事目的から行なわれた。航空機メーカーであるボーイング社がその技術を水上に対して適用する研究を始めパトロール用小型艇を開発実用化した。ベトナム戦争で有用であったことからその後 NATO の依頼でミサイル艇が開発された。ジェット・ホイルの名前で旅客用が開発されたのは 1974 年である。ボーイング社は合計 28 隻を建造した後、ライセンスを川崎重工に提供した。川崎重工では 1989 年から 1995 年までに 15 隻が製造されたが、採算が悪いため現在は建造されていない。イタリアにもライセンスされミサイル艇が建造されている。

日本国内の定期航路に導入されたのは 1977 年で佐渡汽船の新潟港-両津港間航路である。他には東京（竹芝）/ 久里浜-館山-伊豆大島、博多-壱岐-対馬、長崎-福江島、鹿児島-指宿-種子島~屋久島などで運航されている。いずれも燃料費の高騰と慢性的な乗客の低迷に悩まされて赤字経営である。更にごみなどの異物・浮遊物を吸入して運航不能となるトラブルが頻発したり、流木に衝突したり、クジラと見られる生物に衝突して水中翼が破損して高速航行が不能になる事故が数回発生している。沈没寸前に至る事故も発生し

ている。

海洋国家日本では、高速船を造ることは得意だが経営は苦手なようだ。余談を述べる。昨年、高速船「テクノスーパーライナー」の挫折が大きなニュースになった。1,000 トンの貨物を積み、現在のコンテナ船の約 2 倍に当たる 50 ノット（時速 93 キロ）で航行する夢の超高速貨物船「テクノスーパーライナー（TSL）」として 17 年間かけて国が開発推進し、116 億円を投じて建造された船である。ジェット機よりも安く、コンテナ船よりも速い新しい輸送機関「海の新幹線」として、日本国内や近隣アジア諸国との海上輸送の大動脈となることが期待されて開発された。しかし建造された TSL は小笠原行きのフェリー会社で引き取られたがあまりに不採算なため就航できなかった。軍用に使うこともできず造船所に戻された。維持費や係船料が高く廃船の憂き目となった。空気圧で浮上する仕組みを使った高速船であった。流線形をした空洞の「浮体」を水中翼の両側にとりつけ、揚力と浮力、それに空気圧力の組み合わせで船体を持ち上げる方法。推進にはジェット旅客機と同じガスタービンエンジンを用い、浮体の先端から吸い込んだ海水を高速で後方に噴射して航行するというものだった。燃料費の高騰がダメを押した。静岡県のカフェリー兼防災船として係船されたが活躍の場は少なかった。

TSL のプロジェクトは巨額の国費を投入し 1988 年から 17 年も開発が続けられたが、決定的な幕引きに至ったのである。東日本震災の直後、石巻港に係船してホテルがわりにサービスしたこともあったが、係船料の負担に耐えられず廃船に追い込まれた。縦割り行政の弊害もあって被災地復興にも役立てられなかった。高速船の世界的な開発競争は、90 年代前半までは、日本も成果を出していたが、21 世紀になって高速船の世界マーケット（年間 1500 億円程度）をオーストラリアと EU（欧州連合）が支配してしまっている。TSL のように高価な大型高速船は日本のような離島航路ではない活用方法があったはずである。香港、台湾、シンガポールなどのビジネスの才覚のある富裕な華人経営者たちであれば知恵を発揮してカジノ豪華客船などいろいろなビジネス・スキームを考えて成功させたいだろうと悔やまれる。日本人は技術では有能でも商いの方は華人の能力より劣るのであろうか。

## 7. 尖沙咀（チムサーチョイ）

もっとも人間くさい活気が肌で感じられる街だと思う。きれいな高層ビルにはないエネルギーであやしい魅力が凝縮した九龍地域の賑わいを見せる商業エリアである。人通りがとて多く、様々な人種の人間がごった返し、アジアの混沌を象徴するような雰囲気圧迫される。T さんに案内されて研究会の課題本「転がる香港に苦は生えない」の作者星野博美さんが住んでいたアパートもこの雑踏の一角にあり訪れることができた。深水埗（シャムシュイボ）を散策した。星野さんが毎日好んで飲んだミルクティを出す茶餐廳（チャーチャンテーン）で昼食（ドリンク付やきそば）を食した。人気店で座席を確保するのが大変であったが、役割分担してなんとか飲食することができた。香港はケータイ電話が発達しているらしく隣に座ったランニングシャツ姿の中老の男がスマートフォンを使いながら食事をしている光景が異様だった。

このあたりは何でも売っている。露店や店舗を構えた商店の密集地である。ベルト、時計、かばん、古着、薬、中古テレビ、CD、古本、金物、床屋などあらゆるものが雑然と並べられている。太極拳のDVDを求めて中古DVDショップを覗いた。海賊版であろうひどくやすく一枚200円程度である。床にならべてあるDVDを3枚買った。

星野さんのアパートは雑貨屋が立ち並ぶ古い複合ビルのなかにあった。狭い階段を4階まで上ったが、星野さんの住んでいたという部屋206号室は関係のない中国人が住んでいて、近づくとも胡散臭そうにおばさんが戸を閉めた。小説の中にでている写真の雰囲気そのまま伝わってくるような蒸し暑い住居だった。

近くのビルには蛇食屋（協王蛇という店名）があった。2-3人の客が食していたが怖そうな顔つきの西洋女が座って蛇のようにこちらを眺めていた。

私たちはネイザンロード（弥敦道）に歩いた。1960年代に建てられた複合ビルである重慶大廈（チョンキンマンション）の中に入ってみた。観光客が集まる繁華街の一等地にありながら、数多くの安宿が密集しているビルとして世界中のバックパッカーにその名が知れ渡っている。小説「深夜特急」（沢木耕太郎著）の中でも登場してくる建物である。宿の名はゴールデン・パレス・ゲストハウスと云うらしい。漢字で訳すと黄金宮殿迎賓館となる。とても想像できない宿である。

宿の宣伝文句には

交通方便 電梯上落  
環境優美 冷氣設備  
高級享受 招待週倒  
長居短住 無任歡迎

と大げさな律詩が出ている。真偽に関係なくおかしく伝わってくる。

ビルの店のほうは両替商・カレー店・アフリカ料理店・南アジア等の民族衣装店やCD店、紳士服の仕立屋、アクセサリ雑貨店などが並んでいる。南アジア・中東・アフリカなどの出身者のコミュニティーのある場所らしい。このビルは香港の複雑な民族構成を象徴する建物として、数多くの映画や小説の舞台となり映画「恋する惑星」の舞台ともなっている。小説や映画にはインド系の怪しげな魔窟のような雰囲気が記述されていたが、数度のインド旅行をしてきた私たちには、見慣れたインド人やパキスタン人が販売するアメ横のようなマーケットで特に異様な感じはしなかった。植民地時代から香港とインドは商取引が盛んで、日本にはない光景なのだろうとおもう。

前述の『深夜特急』に登場する七言絶句の漢詩がある。

炎炎夏雨●●愁  
肺病呻吟幾度秋  
昔日書生吟勝地  
今宵老殘曳街頭  
（意味）

暑さの中で、そして夕立に打たれながらある愁いもて考える。

肺病に苦しみながら、何度秋を迎え送ったことだろう。

かつては学生として景勝の地へおもむき、詩を詠んだりもしたものだ。

しかし今は、老いた醜い姿をこうして街頭にさらすことしかできはしない・・・

この詩は香港の物乞い（かつてロンドンに留学していた元エリート）が、コンクリートの路上に記したものでこの●●が何なのか不詳という。

この地区は安物や安宿が集まる複合ビルも多いが、近くに有名ブランドを売る高級ショッピング街や高級ホテルもあって混沌としている。ネイザンロードを中心に高級ホテルが立ち並んでいる。植民地時代、英国王室の定宿であった最高級ホテルザ・ペニンシュラ（香港半島酒店）がある。このホテルは太平洋戦争時、英国軍の基地として接収されていた。日本軍が香港へ進駐し九龍を占拠し、日本軍の司令部をおいたホテルである。336号室で、日本軍と英国軍は降伏文書を取り交わし「東亜ホテル」と改名された。戦時中は日本海軍の将校集会所および軍関係者向けのホテルとして使用されていた。戦後は元通りにホテルとして使用されることとなった。ネイザンロードは「香取通り」と命名されていたらしい。ペニンシュラホテルのロビーはゆつたりと広く天井も高い。植民地時代から「ザ・ロビー」と愛称されたティールームのアフタヌーンティーが有名である。これを楽しみにロビーを訪れる客も多い。若い日本人観光客が数組いた。

私たちは夕食までの間、香港の占いを体験したいというSさんたちと別行動をとった。道教寺院の黄大仙には占い師ばかりのアーケードがある。商売から結婚運までありとあらゆる願い事を引き受けてくれ、手相、人相、おみくじ解釈などさまざまな占いを見立ててくれる。HK100ドル近くかかるが実によく当たる評判の占い師がいるらしい。この時、私たちは現実に戻っていた。放射能の線量計を持参してきたTKさんが“不思議なことに香港の放射能レベルは福島に近い高レベルだ。”と神経をすり減らしていた。地球の破滅が刻々と近づいているような気持ちでは、未来のことを知りたいという占いへの期待も消えて、私たちのグループは、ビクトリア・ハーバーの波止場の方を散策することにした。九龍と香港島の中環を結ぶスターフェリーが植民地時代より運航されて住人や観光客の足となっている船着場がある。尖沙咀の波止場は、浜風にあたり、行き交う大小の船を眺めながら人々をノスタルジックな気分させてくれる。旧九龍火車站鐘樓の時計塔が近くにある。この波止場界限はアヘン戦争の引き金になったところらしい。林則徐が大量のアヘンを廃棄して両国が緊張関係にあった直後、英国の商船乗組員がこの波止場に上陸し、水浴び、散歩をして飲酒後村民を射殺、数人にケガをさせた。林則徐は犯人の引渡しを求める。清朝側のねらいはあくまでアヘンの禁止にあった。その後武力衝突に入る。アヘン戦争のあと南京条約、アロー号事件、北京条約が続き英国の植民地となった。また、ここは「007は2度死ぬ」のビクトリア・ハーバー水葬シーンのロケ地でもある。ここから眺める中環の景観も高層のオフィスビルやショッピングセンターが並び現代香港らしい。ソフトフリーズを口にしながら木のベンチに座って浜辺の風に当たりながらロマンチックな気分になった。

スターフェリーにのって中環に渡った。わずか 10 分程度の船旅だが青い海の上に真っ白な航跡が描かれ、その上をゆったりと鳥が舞う。大気が薄紫に変わる夕暮れどきは、対岸の高層建築群に柔らかな灯が入りはじめる。しだいに深まる闇の中で、海面に映るネオンが美しい模様を描いて揺れる。先ほどの街路の興奮から醒め、心が穏やかになっていく自分を感じた。

中環で下船して私たちは晚餐の北京ダックの酒楼に向かった。

## 8. 香港の発展

香港（ホンコン）という名称は珠江デルタの東莞周辺から集められた香木の集積地となっていた湾と沿岸の村の名前に由来している。観光客にはアバディーンとして知られる。南シナ海に面し、気候は、夏に雨が多く冬は乾燥している。夏は海からの季節風と熱帯低気圧によって高温で湿潤な熱帯となる。面積は東京 23 区の約 2 倍程度であるが人口は 700 万人を超えている。「華人」と呼ばれる中国系が最も多く全体の 93%を占める。華人以外で多いのはメイドなど出稼ぎ労働者として働いているフィリピン人やインドネシア人で、あとは旧宗主国のイギリス人である。

「アジアの真珠」とか近年では「アジアの四小龍」と呼ばれたことのあるこの国は難民がつくった町といってもよい。香港人には国家としてのアイデンティティというより町とか都市としてのアイデンティティが強い。この都市はやはり中国人がつくってきた。英国植民地前の香港はマラリアが蔓延し、人が住むのには快適な島とはいえなかった。下水設備が不十分で衛生状態のひどい不毛の島であった。香港は、大陸が混乱するたびに生み出される大量の難民、避難民を受け入れてきた島であった。

古来香港を含む華南一帯では、古くから北の漢民族と原住民との間で混血が進み、漢の文化や技術がもたらされてきた。特に 10～13 世紀の宋の時代には、華北で金や元などの北方民族の侵入が相次ぎ、多くの漢民族が南へ移動したため、香港一帯にも移民が流入した。香港の原住民と呼ばれる人々には、早くから香港一帯に移り住んだ漢民族のほか、客家、蛋家（蛋民）等がいる。客家は、唐の時代から華北から南下を始め、「中国のユダヤ人」と呼ばれることもある。清朝の時代には、香港周辺の荒廃した村を復興させるために、現在の広東省や福建省に暮らしていた客家が、開拓民として移住させられた歴史がある。

南京条約後の太平天国の乱（1850年）では、乱が鎮圧された後、焦土となった華南地方から多くの農民らが香港に押し寄せた。植民地経営が動き出していた時期であり労働力は不足していた。香港政庁も大陸からの人の流入に制約を設けることはなく避難民は九龍地区に次々に定住した。1841年には7500人程度だった田舎町は植民地後急激に増えた。人の流入は20世紀にも続き辛亥革命（1911年）、日中戦争勃発（1937年）によって更に激しくなった。日本軍の進出に晒された上海、広州などから資本家、農民、国民党軍兵士らの避難民が流入した時点では人口は150万人を超えた。第2次大戦後も、大陸では国民党と共産党の戦いが続き内戦を嫌った上海資本家が香港へ脱出した。資本も香港に流入し、大陸から香港に逃れた資本は5千万米ドルにのぼり、300近い上海の企業が

戦乱を逃れて香港に移ったといわれている。上海の富と繁栄は香港に移り、上海企業の資本と技術が香港経済を復活させた。繊維、皮革製品、電気製品などの製造業の新しい産業が発展した。大戦で疲弊した英国は、香港復興を助ける余裕はなく香港政庁と上海からの資本家たちが復興事業を進めた。本土からの難民の大量輸入に香港政庁は制約を設けたが、毛沢東の大躍進政策（1958年～1961年）の失敗は、飢えた人々を更に香港に呼び込んだ。文化大革命でも難民が押し寄せた。香港島や九龍半島の中心部までたどり着けば市民の中に紛れ込み生きることができた。香港の加工貿易はこれら難民の安い労働力によって支えられさらに発展していった。

1980年代に香港の中国返還問題が浮上した折には、不安感のため、香港から海外への移住特にカナダへの移住者が急増した。しかし返還後の香港に一国二制度が適用され経済の自由で安心したのか、返還が経過すると香港からの海外移住は減少した。返還からの15年間香港は経済的な繁栄を維持してきた。その繁栄はかつての英領植民地の香港ではなく中国本土との経済連携によって可能となった。植民地時代に完備された法体系や税制上の優遇措置、高い教育水準、英語の普及から多くの欧米企業は香港をアジア市場の拠点としている。交通の要所であり、大陸を后背地とした金融センターやコンテナを扱う物流基地として発展を続けている。規制が少なく低税率な自由経済を特徴とした中継貿易が発達している。本土系企業からのプレゼンスも大きく本土からの人口流入が増大している。

香港経済のGDPは2,632億米ドル（2012年）であり一人当たりのGDPは3万6667米ドル（2012年）で世界25位である。（ちなみに一人当たりGDPのランク（2012年）は、シンガポール13位、日本15位、宗主国のイギリスは23位、ポルトガル40位、中国87位である。）香港のGDPの80%をサービス産業が占めて金融や流通の要所となっている。新鴻基（サンホンカイ）、恒基地産（ヘンダーソンランド）、新世界集団（ニューワールド）、長江実業のような財閥グループが成長している。

香港における貧富の格差は大きい。特に返還前後に入境した新移民は、財政的に豊かでない人も多く街中の狭いアパートの1室や屋上に作られた簡易ハウスで暮らしている。一方、富裕層の人口も非常に多い都市である。金融資産100万ドル以上を持つ富裕世帯は約21万世帯あり、フランスやインドを凌いでいる。およそ11世帯に1世帯が金融資産100万ドル以上を保有しているといわれる。最近のデータによると個人資産10億ドル以上を保有するビリオネアは40人近くも住んでおりモスクワ、ニューヨーク、ロンドンに次ぎ、世界で4番目に多い都市という。富裕層の多い香港ではメイドを雇用する家庭が多く、その働き手として15万人ものフィリピン人が香港に在住している。某コンドミニアムで“フィリピン人メイドと犬の使用禁止”の貼り紙が出され、フィリピンを「召使いの国」と揶揄するなど、香港人の差別意識が問題となっているほどである。

押し止められない人の流れが香港社会を内側から少しずつ変えている。香港の人たちが懸念した中国本土に呑み込まれる状況は、すでに現実のものとなりつつある。香港の経済は中国への依存度をますます強まっている。中国本土にとって香港は甘い蜜である。一国

二制度は植民地の特質と類似して植民地の生み出す利益を宗主国が吸い上げていく構図に近づいている。中国の支配原理はかつて今も「コネと権力」の社会である。如何に腐敗していてもコネをつかって権力をふるう側に金をまかなければ自身が貧しく落ちぶれてしまう社会である。自分の財は自分で守るしかない社会である。

香港で成功し財をなし、財を持って国外に移民しようとする富裕層が多くなっているという。中国政府のプレゼンスが強大になる傍ら、中国経済のバブルに香港人は不安を感じ始めている。つまり香港人は根底のところ、政府を信用しておらず、自分自身の手で財産を守るために、その最適地を選んでいるのである。その結果、安全なのは国外となり、それが移民となって現れているのである。かりそめの1国2制度で私有財産法が保護されており情報や言論の自由もあるとはいうものの心の奥底ではいつか家族と財産を守る地を探さねばならない日が来るかもしれないという不安は日本人には理解しにくい。香港人が国家としてのアイデンティティを持つことはできず都市としてのアイデンティティでしかない所以である。

## 6. 言語

香港の公用語は中国語（中文）と英語であるが、事実上の共通語は広東語である。漢字は繁体字を利用しており日本人にも理解しやすい。植民地時代より自由港であり国際金融の中心地であることから、香港人は目を常に外に向けてきた。その結果、香港では英語が普及している。今日の官公庁・ビジネス・観光業における優先的言語は英語である。交通標識、トラムやバス、レストランのメニューは英中表記がなされている。タクシー、売り子、観光業界の従業員、警察とも高水準の英語を使うことができ、外国人観光客が英語で話すことの問題は少ない。しかし外部の人間には見えない実態はどうであろうか？

広東語は、中国本土では少数派言語であるが香港では88%が話す言語である。華人社会において読み書きの文書語として使われる「中文」は、「普通話」「北京語」「漢語」「国語」などさまざまな呼称で呼ばれ普及しているが、広東語は話し言葉であるため広東語を使って文章を書くことはない。広東語は漢字とのインターフェースも十分でなく、口語と文字の統合がなされていない。書き言葉は普通話を使っている。普通話と広東語では漢字を用い声調があるという共通点はあるものの発音、語彙、語順などが異なり話は互いに通じないほど隔たりがある。

返還後は、広東語を母語としない新移民の増加や、政治経済面での本土との交流の緊密化で中国の公式言語である標準中国語（普通話）の普及が広がっている。

香港人の95%が広東語を、38%が英語を常用もしくは理解するというデータがある。英語と普通話とは外人、中国本土人や台湾人と会話する時以外は使わない。香港大学などの高等教育機関においては、学生の100%が中国語を母語としているにもかかわらず、授業は全て英語で行なわれ中国語は使われない。

英語は、イギリスの統治が始まってから1974年まで唯一の公用語とされていた。イギリス政庁は植民地経営を補佐する中国人人材を育成する必要から英語による少数のエリート

教育を行なった。Central School やキリスト教宣教師のミッション・スクールにおける西洋人化教育とともにはじめられた。

香港における英語使用の状況については、興味ある研究論文（「香港における言語状況」山田人士・言語文化研究）がある。

“香港では、英語話者の住民は植民地香港の統治者であったイギリス人が大多数で、富裕な中国系住民などバイリンガルとして英語を話す人々を加えても英語話者が全人口に占める割合は2%程度である。とはいえ、イギリスによる長年にわたる植民地経営の結果、英語は政庁や法曹界、大手企業、高等教育の場では不可欠のものとなっており、上位言語としての地位が確立している。70年代以降、香港が国際貿易、国際金融の拠点として成長を始めるにしたがい、植民地の言語として限られた範囲でのみ使われてきた英語は貿易、金融、観光業など経済活動の現場へ浸透していった。そして、英語のできることが高収入に直轄するという事態を目の当りにして、中国系住民たちは経済的成功のカギとして子どもに早くから英語を学ばせるようになった。ただし、英語が第二言語として定着しているわけではなく、彼らにとって英語が外国語であることには変わりはない。英語は特定の職業や社会階層の人々の間での使用に限定されており、一般中国系住民の日常生活における英語使用は限られているのが実状である。この点では、他民族多言語国家においてコミュニティ内で二言語が併用されている状況とは事情がことなっている。

なお、香港における英語の使用場面の調査によると英語が実際に使われるのは、原則として英語母語話者同士か、母語話者とバイリンガル中国人とのインターエスニックな会話に限られる。中国人同士で英語を使うのは嫌がられる傾向があり、場合によっては中国人コミュニティからの断絶を引き起こすことさえあるという。中国人バイリンガル同士が英語だけ使うのは、目上の人と目下の人との公的な距離を維持したい場合である。香港では英語はコミュニケーションの道具というより力の象徴となっている。“

香港では「英語は力の象徴である」である。これは日本がこれから行おうとしている言語教育の未来像ではないかと思う。英国政庁が植民化政策のために行なったやり方を日本でもやろうとしている。英語重視就職試験、企業内英語公用化、小学校の早期英語教育も同じことを目指しているのではないかと感じた。確かに国際ビジネスには英語の習得は必須である。しかし母語よりも大事なものだろうか。日本語すら習得できていない小学生低学年にまで英語教育を義務づける国策には賛成しかねる。いまや英語はコミュニケーションの道具というより力の象徴なのである。日本において日本語教育よりも国際化に対応するために英語教育に重点をおく施策は、言い換えれば“グローバル化する社会に適応し拡大する貧富の格差の勝ち組になるための力の道具を準備する。”という狙いである。逆に見るとグローバル化によって富を寡占する人たちにとっての便利な道具づくりではないだろうか。近代化における英語の力は大きかった。明治の開国以来の近代化によって経済的繁栄を得ることはできた。しかし失ったものも大きい。幸福と満足にあふれていた日本人の価値観が変わってしまった。幕末維新のころ日本に滞在した外国人の訪日録をあつめ近



代化以前の社会の実相を明らかにした「逝きし世の面影」(渡辺京二・平凡社)を読み返してみた。簡素な生活の中にも人間の楽しさがあった江戸庶民のほうか物欲や金銭欲にとらわれている今の日本人よりも幸福度ははるかに高かったと思う。戦後日本はアメリカの高度資本主義の巨大なシステムに呑み込まれてしまったところがある。アメリカの政策に一喜一憂する政府の政策対応や弱肉強食の企業社会、小学生まで浸透している競争社会をみると、”長いものには巻かれろ”という強者へ追従する価値観が日本社会のあちこちで圧倒的になっている。これはあらゆる面で中国を中心に追従し朝貢してきた冊封の韓国、ベトナム、琉球などで普及した事大主義と同じように思われる。”「弱き」を助け「強き」をくじく”心意気はない。多くの日本人が経済成長に振り回されてニヒリズムに陥っている。アメリカの覇権にとっては日本をフィリピンのような英語の国にすることが、もっとも利用しやすいのであろう。英語はコミュニケーションの道具というより経済的成功のために期待して学習する言語なのである。自国の文化、コミュニティ、歴史などを背景に母語を学ぶ本来の言語の学び方を忘れ経済のために英語を学習するのである。香港人の言語と変わらない社会を理想としているのである。母語を忘れ如何に英語が上手く使っても二流の英米人にしかなれない。思考力を深め創造力の発達を促す母語の教育を疎かにすることの弊害は大きい。将来は日本語も香港における広東語のように公用語からはずされることになるのだろうか。

## 8. 宗教

香港における宗教は仏教・道教、ついでキリスト教徒(プロテスタント 25 万人、カトリック 25 万人)が多い。道教に根ざした思想や風習が広く市民の間に浸透している。関帝や天后など道教の神を祀った寺院(道観)が、中心部・郊外を問わず、各所に建てられている。近代的なビルの一角やオフィス、店舗の片隅に関帝が祀られていたり、路傍などに土地神を祀る小さな祠がしつらえられたりしていることも多く、線香や供物が絶やさず供えられている。日本におけるお地蔵様のような土着信仰は香港の社会にも強く残されている。

イギリスによる長年の統治の影響により、キリスト教もかなりの程度信仰されている。数多のキリスト教宗派の教会が中国の神像の隣に立ち、仏教・道教・シーク派の寺院が、モスクとシナゴグが両立している。伝統と革新の融合である香港文化は、常に変化し続ける社会に息づきながら古くからの文明も存在する場所であり東洋と西洋が出会う場所であることを表わしている。香港は、老人がタブレットで中国古来のボードゲームに興じ、旧正月と同様の情熱でクリスマスを祝い、最先端の高層ビルが風水師のアドバイスのもとで建設される都市である。

「転がる香港・・・」のなかで香港の修道院にインド人シスターが異常に多いことを疑問に思う場面がある。香港における布教のため広東語を学んでもアングロサクソン系のシスターは香港のカトリック系学校の教師や生徒たちが英語を喋るためなかなか広東語を覚えることができない。広東語しか話せない下層の民への布教のためにはインド人のシスターのように下層民のいる住居と一緒に住みながら広東語を覚えることのできるシスターが

役に立つ。イギリスが警察や軍隊要員としてインド系人を香港に送り込んだのと同じ論理が教会関係者にもあるのでないかと伝道と福祉にも侵略や植民と同じものを感じている。マドラスやゴアから派遣されたインド人聖職者がこの地で多いのも植民政策の傭兵や尖兵たちと同じ役割だったのかもしれない。

## 9. 食文化

四足なら飛行機と机以外は何でも食する旺盛な中国食や医食同源の歴史は香港の街に凝縮されている。「食在香港」である。香港では外食産業が発展しており、中国料理のみならず、世界各地の料理を出すレストランが、庶民向けの安価な食事を出す店から、世界的に名を知られる高級レストランまで、さまざまなものが存在している。中国料理では、広東、上海、北京、四川、潮州など中国各地方の料理を出すレストランが香港中にあるが、このうち約 8 割が広東料理のレストラン（酒楼）である。このほか海の幸を専門に取り扱う海鮮料理店が西貢などに多数存在し、日本人にも人気がある。

1 日目はTさんの案内で競馬場近くにある「海鮮中華」という海鮮料理屋で夕食をした。生簍に魚や海老が泳いでいる。生きづくり料理は日本料理の影響だろう。ここでは、ロブスターのチーズボンジュ、シャコ揚げ、揚げ餃子が珍味・美味であった。

2 日目は昼食で入った、マカオ・セナド広場近くの「黄枝記粥麵店」という店のワンタンと麵がとても旨かった。特に雲吞蝦子撈麵（Braised noodle w/wonton & shrimp eggs）はおすすめである。この店にはバッテン総督も時々来ていたようだ。夕食にはマカオ料理を食べたが鰯や豚肉などを素材にした中華風ポルトガル料理とも言える異国情緒溢れる料理であった。

3 日目の打ち上げは北京より美味しいという老舗「北京楼」で北京ダックと紹興酒を食べた。A新聞OBのIさんの後輩で香港住人のYさんが同席した。Yさんは香港を拠点として韓国、中国、日本を取材されていて、「現代の三国志」の視点から3カ国の実情などを伺うことができた。この高級店の北京ダックのパリッとした皮と甘味噌の調味が絶妙であった。

「転がる香港・・・」では、“香港の人は食べることが好きだ。食べることに命を賭けると言っても過言ではない。そこにはすべての資本である健康を重視する、体を大切にするためには体のもとである食を重んじるという意識があることはもちろんだが、結局は、舌だけは自分を裏切らないということではないかと私は思う。香港の人と議論して勝った試しはないけど、特に食に関しては自分たちの価値観に絶大な自信を持っている。食のことがとなると突然食ナショナリストと化し、他の民族や文化は一切排除してもよいと思っている節がある。・・・その自信は中国四千年の歴史を根拠にした中華料理そのものに対するゆるぎない信頼に「豊かな香港には世界中で最も良質な中華料理が集結している」という中国本土に対する優越感が加わり、それは「便利と快適って最高」という香港特有の快適崇拜が加わり、傍から見てみると実に奇妙な自信である。”

美食のあと酔って見上げる夜空に映す赤と黄色のネオンサインの「酒楼」の文字がひどくまぶしかった。

## 10. 香港の日本人

香港在住の日本人は約1万5千人いるという。返還後の道は安易ではなかった。1997年のタイに始まるアジア通貨危機に見舞われ、株価の大幅な下落、不動産価格のダウンなど返還バブルは弾けた。2003年にはSARS（重症呼吸器症候群）が流行し観光客の足が遠のいた。経済的な繁栄の維持は中国の支援によって可能となっている。経済協力協定（CEPA）によって香港企業の大陸での優先的な市場開放、関税の撤廃など優遇策ができた。大陸からの個人旅行、自由行を認めて香港経済は再び活性化した。香港の経済は中国への依存度がますます強まったともいえる。香港の人たちが懸念した中国本土に呑み込まれる状況は、すでに現実のものとなりつつある。

最終日は、今回の香港への旅のきっかけとなり案内していただいた香港在住のTさんの勤務する日系企業H自動車オフィスを見学させていただいた。前日ビクトリア・ピークからみた超高層ビルの30階にあるオフィスを訪れた。全室ガラス張りで香港市内が一望できる。香港から中国大陆全土の市場と製造拠点を管理し、更に世界中の製造拠点や支店とネットワークを組んでグローバル展開をしている。Tさんは元商社マンであったが大病を患い入院後、復帰してH自動車香港支店に転職し国際舞台で活躍されている30代の企業戦士である。もともと学生時代から世界各国を回っていた国際派であったが香港に来て世界が更に見えるようになったという。将来はアフリカのビジネスが希望とのことですがますますグローバルな視野は広がっているようだ。既得権益や制度的制約の多い国内の事業よりも香港と言う規制の少ない自由な場所の方が日本の若い人材にとって活躍の場が多いようである。研究会の課題本「転がる香港・・・」は、彼が紹介した好著である。お陰で観光コースでは分からない深い香港の旅ができた。振りかえってみるとチムサーチョイの雑踏、ビクトリア・ピークからみた摩天楼の競演、ビクトリア・ハーバーのやや濁った海の色が印象として残っている。

(2013.10.2 記)

## 参考文献

- 1) 「観光コースでない香港・マカオ」/津田邦宏・高文研
- 2) 「わがまま歩き香港・マカオ」/ブルーガイド
- 3) 「転がる香港に苔は生えない」星野博美・文春文庫
- 4) 「アジア史概説」宮崎市定・中公文庫
- 5) 「国民の歴史」(下) 西尾幹二・文春文庫
- 6) 「深夜特急 香港・マカオ」沢木耕太郎・新潮文庫
- 7) 「教養としての世界史」西村貞二・講談社現代新書
- 8) 「逝きし世の面影」(渡辺京二・平凡社)
- 9) 『阿片王』佐野真一・新潮社
- 10) インターネット・WIKI 各種

1 1) <http://hp.vector.co.jp/authors/VA024680/history/d1-6.htm>

